

VI群はV群同様遊水池になお数基の周溝墓の存在を推定できる。四隅切れと推定される周溝の一部の検出にとどまったが、土器の古相からS R58が起点墓である。S R59は土器相からこれに続くものと思われ、これもIIa期に考えた。III期には周囲の四隅切れ周溝墓、S R57・60を、全周形のS R61・62はIV期に考えた。

VII群はI・VII群と同様独立して営まれ、全周形、一隅切れ形の周溝墓の構成である。遺物が少なく土器の面での時期の判断が困難だが、ほかの群での小形の全周形周溝墓が群内で主体的な位置を占めることがなく、周辺の選地をして後出的なあり方をしているので、本群は全てIV期と考えておく。

VIII群はS R15単独で存在する。I・VII群のように全周形の周溝墓のみで構成される群の起点と墓と思われ、発展がないまま墓域の廃絶を迎えたものと思われる。主軸偏差はS R19・20・23と近似しこれらの群との関連を想定できる。遺物がないが形態と配置状況からIV期であろう。

なお、紙面に余裕がないのでいちいちその根拠を示すことができないが、既に報告済みの広面遺跡の方形周溝墓群の形成過程についても本遺跡の各時期に照らして私見を併せて図示しておく。

### 3. 方形周溝墓出土木製品について（S R41出土の二叉鋤に関連して）

#### (1) はじめに

本遺跡の周溝墓群中S R41からは一木二叉鋤が、S R13からは棒状木製品が出土している。

周溝墓から木製品が出土したのは、関東地方では初例である。本格的な検討のためには類例を待って、それらと比較しなければならないが、その前段階として本遺跡の木製品に限った詳細なデータの提示と、主として西日本を中心とする他遺跡との比較を行うことによって今後の研究の指針を得る必要がある。本項では、この両点に絞り、検討を行うことにしたい。

#### (2) 中耕遺跡出土の木製品

本遺跡出土の木製品は、S R41の二叉鋤、S R13の棒状木製品の2点である。

S R41の一木二叉鋤は、溝底から、地山の黄灰色シルト直上から出土している。軸方向は周溝と直交する方向である。遺存状態は良く、身の一部を欠くがほぼ完形で出土している。全長102cm、身幅22cm、柄長50cmの一木造り式の鋤であるが、身中央を先端から切込み二叉としている。握りから身まで丁寧に加工されており、握り及び柄の部分には使用時のものと思われる痕跡が残る。握り部の痕跡は、握った時に力の最も加わる部分に明瞭な摩滅が窪みとなって残っている。柄の部分では、身から近い位置にすり減ったような跡が連続してみられる。これらの痕跡は当時の使用痕と考えられ、現在のスコップの使用法と同じように使用されたことが分かる。また、使用材はアカガシ亜属で、耕起具では一般的に選定使用される樹種である。

これらのことから、本例は鋤本来の目的で作成され、使用されたことが分かる。ただ、このような一木造り式の二叉鋤というタイプは類例が少なく、弥生—古墳時代で、管見に触れる限りでは、奈良県桜井市城島遺跡・外山下田地区（清水進一1991）の6点、埼玉県行田市小敷田遺跡（吉田稔

1991)、深谷市深谷町遺跡(澤出晃越1985)の各1点ずつ、計8点のみである。このようなタイプの鋤が、地域的なものか、その土地の土質等に起因するものか、また、組合せ式の二叉鋤との間には機能的相違があるのかなど、今後類例を待って検討して行く必要があろう。いずれにせよ、本例に関しては、明かに鋤本来の目的で作成、使用され、最終的に周溝墓の周溝に入れられたものと判断できる。

S R33の棒状木製品は、地山である青灰色砂に半ば沈み込む状態で出土している。軸方向は周溝の軸方向よりやや東に寄っている。劣化が著しく、20cm~50cmに分断されて出土しており、途中欠落した部分もある。推定長3m90cm、最大径7.3cmで広葉樹原木の樹皮を剥いただけの材を使用している。所々に節があり、決して太さが一定していない。加工痕らしきものは、長さ2cm~5cmのえぐりがほぼ等間隔に3箇所、ほど穴状の加工が2箇所確認できるにすぎない。その加工も摩滅がはげしく、加工工具等が想起できるものではない。また、その加工が何のためになされ、どう機能したかは不明である。

いずれにせよ、周溝墓周溝底からの出土だけに、本例を含めて今後周溝墓出土の木製品には注意する必要がある。

### (3) 方形周溝墓出土の木製品

方形周溝墓出土の木製品は、管見に触れる限りで現在13遺跡で79例が出土しており、次の各点を特徴的な傾向として認めることができる。

- ①時期 弥生時代中期、弥生時代終末から古墳時代前期の二時期の例が最も多い。
- ②地域 全時期を通じては、各地域ともほぼ同様の割合を分け合っているが、中期段階では西日本に中心的な分布がみられる。
- ③器種 弥生時代では鋤が抜きん出ている。  
古墳時代では様々なものがみられる。
- ④出土遺構 群中で特に大型というわけではない。  
土壙、ピット等の施設に納められているものがある。  
北・西溝が多い。
- ⑤出土状況 溝底に据え置かれたものと、流れ込みの二者が認められ、比率としては流れ込みの割合が高い。  
特に溝底に据え置かれるものは、鋤、鍬の耕起具と棒状木製品に限られる。

### (4) 検討課題について

この様相から検討すべき課題として次の各点が挙げられる。

- ①弥生時代中期、弥生時代終末から古墳時代初頭の例が多いが、それは当時の時代背景と何らかの形で結び付くものなのか。
- ②後期の例が現段階ではごく少数しか見出せないが、中期の例と中耕・矢部・馬場・小敷田遺跡の例を同様の系譜のものとして扱って良いのか。

## 方形周溝墓出土の木製品

No.	遺跡	所在地	時代	遺構(形態・規模)	遺物	出土状況
1	中耕	埼玉県坂戸市善能寺	弥生末～古墳前期	第13号方形周溝墓西溝 (全周・方台部長11.1m、深さ1.2m)	棒状木製品	棒状の刻み目に入った細い材、溝底の地山の黄灰色シルトより若干浮いて出土。軸方向は周溝と平行、直交する方向で短いものが置かれている。
				第33号方形周溝墓東溝 (四隅切・方台部長11.4m、深さ85cm)	棒状木製品×2	棒状の刻み目に入った細い材と、杭状の棒材。細い材は溝底からわずかに浮いており、杭状のほうは溝底出土。
				第41号方形周溝墓西溝 (全周・方台部長14.0m、深さ1.1m)	一木二叉鋤	軸方向は周溝の軸方向より東に寄っている。地山の青灰色砂になかば沈み込む状態で出土。
2	小敷田	埼玉県行田市小敷田	古墳前期	4区5号周溝墓 (方台部長13.2×11.9m、周溝幅1.4～1.5m、深さ30cm)	礎板・叉鋤・大足・箱形容器、各1	6号周溝墓と同様の出土状況を呈する。
				4区6号周溝墓 (方台部長7.9m、周溝幅1.5m、深さ30cm)	台付容器×2、用途不明品・杭・建築部材・木鍤・各1	出土層位・位置一定せず、流れ込みと思われる。同時期の木製品(特に容器等)が含まれ、墓前祭に使用の用具が流れ込んだ可能性もある。(吉田稔氏御教示)
			古墳前期	4区7号周溝墓 (方台部長8.1m以上、周溝幅1.0～1.5m、深さ30cm)	棒・叉鋤・板・木製容器・用途不明・各1、木鍤×2	穂のついた炭化米が南コーナーより出土。木製品の出土状況は6号周溝墓と同様。
			古墳前期	4区8号周溝墓 (方台部長10.2×9.2m、周溝幅0.8～1.5m、深さ30cm以上)	エブリ・材・弓・着柄鋤・棒・田下駄、各1	6号周溝墓と同様の出土状況を呈する。
			古墳前期	4区9号周溝墓 (方台部長10.1m、周溝幅0.7～1.0m、深さ30cm以上)	台付容器、横槌、柱、叉鋤、各1	6号周溝墓と同様の出土状況を呈する。
			古墳前期	4区10号周溝墓 (方台部長9.9×7.7m、周溝幅1.6～1.1m、深さ30cm)	大足×1	6号周溝墓と同様の出土状況を呈する。
3	馬場	東京都北区豊島	弥生終末	方形周溝墓	叉鋤×1、板材(棺材か?)	叉鋤は北溝底面に接して、板材は不明(出土はそれぞれ別の方形周溝墓、中島広顕氏御教示)
4	瀬名	静岡県静岡市	弥生中期中葉	8区3号周溝墓南溝 (不明)	組合鋤×1	底面、周溝軸方向にはほぼ平行に置かれた状態、整理中で、詳細不明。(中山正典氏御教示)
5	椿野	静岡県浜松市都田町	弥生後期後葉	第1号方形周溝墓 (不明・方台部長一辺14m以上、周溝幅1.8～1.1m、深さ30cm)	棒状木製品×2	南溝拡幅部、底面から10cm浮いて出土。周溝と平行に置かれた状態、周辺の底面から底部を欠失した壺が出土している。
6	角江	静岡県浜松市入野町	弥生中期中葉	1号墓南溝 (不明・方台部長8.4m、周溝幅80cm以上、深さ50cm)	組合鋤×1	ほぼ底面、調査中のため詳細は不明。(塙本裕巳氏御教示)
7	朝日	愛知県名古屋市西区ほか	弥生中期前葉	61NSZ208西溝 (四隅切・方台部長33.5m、周溝幅7.5m、深さ1.7m)	狭鋤×2	最下底。周溝の軸方向に沿って2本を点対称に置く。
			弥生中期後葉	61TSZ301北溝 (四隅切・方台部長35m、周溝幅11.0m、深さ1.7m)	一木鋤×3	北溝東端溝底。周溝の軸方向に直交する方向に並べて出土。
					組合鋤×2	北溝西部最下層。
					田下駄×1	東溝下層上部。
					広鋤未製品×2	溝中央上層。
			弥生中期後葉	61TSZ303西溝 (不明)	狭鋤×2	最下層、61NSZ208と類似した状態で、こちらは接して出土。
			弥生後期中葉	SX105南溝 (全周か・方台部長7.5m、周溝幅1.6m、深さ30cm)	加工板材×1 棒状木製品×7	周溝底面。軸方向に沿って出土。方台部墳丘?遺存。

No.	遺跡	所在地	時代	遺構(形態・規模)	遺物	出土状況	
8	松ノ木	三重県 津市 安東町	弥生中期 前半	方形周溝墓 2基 (四隅切・方台部長 1辺19m)	組合鋤×1	北溝、出土状況不明。	
					帆立状木製品	西溝、出土状況不明、深さ不明。	
9	鳥丸崎	滋賀県草 津市下物 町地先	弥生中期 前半	10号墓南溝 (四隅切・方台部長 6m、周溝 幅1.6m)	木偶×1	南溝東寄り底面、他の木製品と共に流れ 込みの状態で、周溝底の腐食土中より出 土。	
10	矢部	奈良県 田原本町 矢部	古墳時代 初頭	T-1 方形区画 墓(方台部長13.2 m×12.3m、幅 1~1.5m、深さ 0.6~1m)	SD-301S	槽×1	下層の炭化物・焼土粒子を含む黒色土中 から周溝の軸方向に沿って出土。これらの 製品の他に、自然木、木葉、植物種子(炭 化コメ、ダイズ、アズキ)、植物纖維等が出 土。
				SD-301E	棒状木製品×2	下層の炭化物・焼土粒子を含む黒色粘土 中から出土。砾石・土器群と伴出。	
			古代時代 前期	T-4 方形区画墓 SD-304(不明、規模も不明)	棒状木製品×2	1点は抉入、1点は管様。前者は南東コー ナー底面より20cm程浮いた淡灰色土中出 土。後者は南溝東寄り、底面より20cm程浮 いた淡灰色粘土中より出土。	
11	鬼虎川	大阪府 東大阪市 西名切町 ・弥生町	弥生中期 前葉	3号周溝墓 (不明・現存 5m、周溝幅1.8~ 2.6m、深さ1.0m)	一木鋤×1	北東溝底面。北東溝の西端にある土壙状 の落ち込みの縁に周溝の軸方向に沿って 出土。	
					鋤の柄×1	北西溝より出土。出土状況不明。調査区域 外に大部分がかかり規模は不明。	
12	瓜生堂	大阪府 東大阪市 瓜生堂・ 若江新町	弥生中期 後半	A区1号周溝墓北溝 (全周・方台部長19.5m×11m、 周溝幅 6 m、深さ 1 m)	組合鋤×1(身部 のみ)	北溝最上層、洪水による青灰色砂による 流れ込み。	
			弥生中期 後半	A区1~2号周溝墓間周溝 (溝幅3.5m×深さ70cm)	組合鋤×2 一木鋤×2	境の明瞭でない1・2号共有の周溝。1 号周溝墓北溝と同様の砂による流れ込み。	
			弥生中期 後半	A区2号周溝墓 (全周・方台部長16×11m)	櫛×1	西溝南半周溝底、出土状況不明。	
			弥生中期 後半	C区11号周溝墓 西裾2号土壙 (方台部長10~12m)	一木鋤×1	西溝南端にある溝中土壙と考えられる隅 丸方形の土壙から出土。2.6×0.6~0.7× 0.4m、溝底から一層を挟んだ暗灰色砂層 中から伏せた高杯部に乗せた状態で出 土。	
			弥生中期 後半	D区21号周溝墓(全周)	鞘状木製品×1	東北溝上層から土器片とともに出土。流 れ込みか。	
			あかかき状木製 品×1		拡張する前は西北周溝の終りになっていた不整円形の土壙から出土。径約2.5m、 深さ0.4m、流れ込みか。		
			鋤先×1		拡張する前の周溝。周溝長7.3m、周溝幅 1.4m、深さ40cm、流れ込みか。		
			弥生中期 後半	H区1号周溝墓 西溝内ピット (部分的調査で規模不明)	一木鋤×1	西溝南西部隅の溝底の径40cm深さ15cmの ピット内から出土。上に完形の甕がお かれていた。	
			弥生中期 後半	H区7号周溝墓 (全周・方台部長 7 m以上、南 溝は幅1.9 m、深さ50cm)	梯子×1 柱根×1	部分的な調査のため出土状況不明。規 模等不明。	
13	雁屋	大阪府 四条畷市 江瀬見町	弥生	方形周溝墓(詳細不明)	鳥形木製品×1	周溝西側。	

各遺跡の文献はP323を参照

- ③中耕等と、ほぼ同時期の周溝墓以外の墓制、例えば纏向石塚等で見られる木製品、あるいはその後の前期古墳や服部遺跡等で見られるものとは関係があるのか。
- ④周溝墓出土の木製品が、その時期の木製品全体の中で日常持っている機能は何か。また、周溝墓で使われることにより、特別な造作が施されているか。
- ⑤鋤・鍬・棒状木製品を施設内に納めたり、周溝底に据え置く行為は何を意味するか。
- ⑥同様に矢部遺跡で見られる下層に埋棄する行為は何を意味するか。
- ⑦木偶や鳥形木製品、棒状木製品の周溝墓に関係する機能とは何か。
- ⑧いわゆる供獻土器を用いる儀礼とこれらの木製品を用いた儀礼との関係は何か。
- ⑨木製品を用いる行為は周溝墓全体の儀礼中でどのように位置づけられるか。
- ⑩流れ込みの遺物が示す造墓集団の間接的行為とはどのようなものか。
- ⑪弥生時代の農耕祭祀とこれらの行為はどのような関係があるか。

これらを整理すると、次の手順での検討が必要となる。

- 周溝墓出土の木製品は、日常どのような機能をもつか、また周溝墓から出土することにより、特別な造作が施されているのか。
- 鋤・鍬・棒を周溝底や施設内におく行為は何を意味するか。
- 流れ込みの遺物が示す周溝墓に関連する間接的行為とは何か。
- 弥生時代中期と弥生時代終末～古墳時代前期の例は一連のものとして評価できるのか。
- 木製品を用いた行為は周溝墓全体の死者儀礼の中でどのような位置を閉めるか。

a は b・c の機能を推定する際に欠くことのできないものである。b・c を踏まえて d をし、更にその位置づけ e を行う必要がある。

上述の諸点については、現在検討中である。その中間報告として、土曜考古学研究会の91年10月例会で「方形周溝墓出土の木製品」と題して発表を行ったが、不十分な内容を露呈したに過ぎないものであった。その際に頂いたご意見についても今後検討していきたいと考えている。

またこの性格を考える上で使用痕の有無等も大きな問題となるが、現在各地に足を運び、実見を重ねているところで、発言できる段階ではない。中耕遺跡出土の木製品についてはこれらの全体の中で再度位置づけを行うことにしたい。再論を期して一旦稿を閉じることとする。

(福田 聖・野中 仁)

## 註

- 澤出晃越 1985 『深谷町遺跡』深谷市教育委員会  
 清水真一 1991 『桜井市城島遺跡外山下田地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会  
 吉田 稔 1991 『小敷田遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団